



大阪大学大学院人間科学研究科

附属

未来共創センター

年次報告書 2019

Annual Report 2019

未来共創センターとは？

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、1972年に、「人間科学」の名称を掲げる日本最初の学部として創設されました。人間科学部・研究科の掲げる「現場に寄り添い、課題を探り、その課題解決に向けた学際的な視点からの研究活動の成果」を学内外に発信しながら、人間科学研究科と外部の結節点となることを目指した附属未来共創センターが2016年4月にスタートしました。

研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、新たな学問領域の開拓を支援することも、当センターの目的です。そして、これらの活動を通して、学部学生・大学院生に向けて多様な学びの場を提供することも目指しています。

さらに、2017年度からはOOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社会学連携活動も開始し、2019年度には14を超える協定が生まれました。これまでのセンターの活動が、「研究成果の社会発信」を主に目指すものとするなら、OOSによる連携・協働活動は、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を試みるものです。

OOSが創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。

多様な活動を通して 社会への貢献をめざします

オリジナリティあふれる多様な活動を発信し社会貢献をめざしています。

◇人間科学セミナー／出張授業

大学内で、または大学の外で、本研究科の教員が研究成果を発信するセミナーや講義をしています。

◇まなびのカフェ

参加者と共に語りあう、交流型の学びの場です。教員が外に行くだけでなく、外部のパートナーが大学に来て共にまなぶ場を、気軽なカフェとして実施します。

◇「シリーズ人間科学」の発刊

研究内容を一般にも分かりやすく発信する本として、本研究科の教員がテーマに合わせて共同で執筆しています。これまでに「食べる」「助ける」「感じる」「学ぶ・教える」「病む」の5冊が発刊されています。

◇ジャーナル『未来共創』の発刊

最新の研究や活動報告をまとめたオンラインジャーナルを、年1回発刊します。

大学らしい「共創の場」から 共創知をうみだします

大学における学びや研究を充実させ、多様なアクターと共に新しい「知」をうみだします。

◇研究会の運営

大学外からも参加可能な「共創知研究会」を主催しています。また、テーマを決めた研究会も実施しており、2019年度は「インクルージョンと共生」をテーマに多分野の教員・学生が議論を重ね、特集論文として発信します。

◇ランチトーク／ナイトトーク

学生主催のイベントです。「表現の自由」「ジェンダー」「外国人と多様性」「大学教育とは？」など、今注目される話題を中心に大学院生・学部生が話題提供し、熱い議論が繰り広げられています。

◇OOS協定

産官社会学連携により、人間科学の教員とパートナーと共に、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」を支援・活用し、共創知をうみだします。

目 次

はじめに	1
I 未来共創センターの概要	
1. 設立の経緯と背景	2
2. 活動目的と概要	3
3. 運営体制	3
II 活動報告	
活動概要の一覧	4
1 センター主催のイベント	
1.1 人間科学セミナー	9
1.2 まなびのカフェ	14
1.3 ランチトーク/ナイトトーク	16
2 OOS	
2.1 OOS 協定	19
2.2 OOS 関連イベント	19
2.3 OOS センターシンポジウム	22
3 研究事業	
3.1 研究会の運営	24
3.2 ジャーナル『未来共創』の発刊	26
4 教育事業	
4.1 シリーズ人間科学の刊行	28
4.2 『私の一冊』の刊行	29
4.3 English Skill-up Session	29
5 JICA 大学連携	30
6 ラボ関連	
6.1 Ethnography Lab	32
6.2 災害ボランティアラボ	33
7 その他の活動	34
III 未来共創センターの活動に関わった皆さんの声	
山本栞理 八木景之 ごうじりつこ 杉原薫子 寺本弘伸	36

はじめに

未来共創センターの4年目が終わりました。この1年間の活動を冊子としてまとめ、報告いたします。

人間科学部・研究科の「現場に寄り添い、課題を探り、その課題解決に向けた学際的な視点からの研究活動の成果」を学内外に発信しながら、人間科学研究科と外部の結節点となることを目指した附属未来共創センターが2016年4月にスタートしました。研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、新たな学問領域の開拓を支援することも、当センターの目的です。そして、これらの活動を通して、学部学生・大学院生に向けて多様な学びの場を提供することも目指しています。当センター4年目の活動も、これまでと同様に手探りではありませんでしたが、順調に展開することができたと思います。その内容を、この報告書でご確認いただければ幸いです。

また昨年度からは、従来の活動に加え、OOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社会学連携活動の拡充に努めています。設立当初のセンターの活動が、「研究成果の社会発信」を主に目指すものとするなら、OOSによる連携・協働活動は、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を試みるものです。この活動はまだ緒にのついてばかりですが、ようやく軌道にのってきました。今後は、センターの活動の中核を担うものと位置づけていきたいと考えています。

当センターの活動の趣旨を御理解いただき、ご支援をいただいた多くの方々に御礼を申し上げますとともに、次年度以降の継続したご支援をお願いする次第です。さらに、本報告書をご覧になった皆様方が、私たちセンターの活動に加わっていただければこれほどうれしいことはありません。何卒よろしくお願いいたします。

設立期の2年間にわたり初代センター長を務められた中道正之教授からバトンを受け、昨年度からの2年間、私志水がセンター長を務めさせていただきました。センターの諸活動を軌道に乗せ、「人間科学研究科に未来共創センターあり」と呼ばれるような存在に高めていくという目標の達成に向けて頑張ってきました。その夢の実現は、来年度からセンター長を務められる山中浩司教授に託すことになります。

これからも、学内外の多くの方々がセンターの活動に参画し、当センターが創造的かつ実践的な活動拠点に育っていくことを心より願っています。

2020年3月31日

未来共創センター長 志水 宏吉

I 未来共創センターの概要

1 未来共創センター設立の経緯と背景

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、1972年に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。4年後には大学院も設置され、当初から設置されている人間科学専攻(4学系：行動学系、社会学系、人間学系、教育学系)と2007年に大阪大学と大阪外国語大学の統合によって設置されたグローバル人間学専攻(1学系：グローバル人間学系)の2専攻5学系体制で、教育研究を展開してきました。

しかしながら、現代社会の急激な構造変動とそれに伴う人間生活の本質的な変化の中で、人間科学部・研究科が創設以来、最重要視してきた「自らの専門領域を深化させながら、俯瞰的な視点を持って、異なる学問領域との多様な連携と融合を実践する学際的な教育・研究活動」をさらに推し進めなければならないと認識するに至りました。そのために、新しい枠組みが必要であると、私たちは結論しました。

そこで、本研究科では従来の2専攻5学系体制から、1専攻4学系体制に改編することを決定しました。具体的には、人間科学専攻(行動学系、社会学系、人間学系、教育学系の4学系)とグローバル人間学専攻(グローバル人間学系の1学系)の2専攻を、人間科学専攻(行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系)の1専攻にしました。

新組織としての人間科学専攻には、新しい学問領域としての「共生学」の開拓を目指して、従来の5学系の教員が参集して「共生学系」を創設します。今日の多様化する社会においては、紛争、大規模災害、環境汚染、貧困、高齢化、格差などあらゆる問題が生じ、人々の間に、あるいは社会に様々なレベルでの軋轢を生みだしています。それゆえに、「人種、民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障がいなどの違いを有する人々が、その違いを認めながら、共に生きること」である「共生」を学際的に研究する「共生学」の構築を、本研究科は目指すことになりました。

本研究科は、従来から、国内外の大学や研究機関との国際共同研究や、学内の他部局との共同研究を積極的に展開し、「現場に寄り添いながら、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。この機能を一層強化するため、今回の新体制への移行に際して、本研究科と大阪大学他部局、国内外の大学・研究機関、NPO・NGO等多様な団体、さらには市民社会をつなぐ「結節点」として、本研究科内に「未来共創センター」を新たに設置しました。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属

未来共創センター

2 活動目的と概要

本センターは、本研究科教員の個別の学問領域における研究の機能強化だけでなく、異なる研究領域の研究者との接触や協働を通して、新たな融合的学問領域の展開と、国内外の現場に寄り添った実践的な教育研究活動の実現を目指します。

学部学生や大学院生は、本センターが企画・運営する公開講座、セミナーやまなびのカフェ、さらに学術図書の企画・出版等の事業に参加することで、研究成果の一般社会への還元方法やコミュニケーション力・対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力などの実践的能力を身に付けることが期待できます。さらに、2017年度からはOOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする社会学連携活動も開始し、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を目指しています。

3 運営体制（2019年度）

《未来共創センター構成員》

未来共創センター

志水 宏吉 教授〔センター長〕（兼）	稲場 圭信 教授（兼）
渥美 公秀 教授〔副センター長〕（兼）	河森 正人 教授（兼）
岡田 千あき 准教授	栗本 英世 教授（兼）
中野 良彦 准教授	白川 千尋 教授（兼）
杉原 薫子 特任准教授	高田 一宏 教授（兼）
山本 晃輔 講師	中道 正之 教授（兼）
木村 友美 講師	岡部 美香 教授（兼）
	森田 敦郎 教授（兼）
	蔭山 裕子 事務補佐員（2019年12月まで）

国際交流室

Scott North 教授〔室長〕
安元 佐織 講師
毛利 仁美 事務補佐員

学生支援室

入戸野 宏 教授〔室長〕
中村 瑛仁 講師
山田 雅代 事務補佐員

サイバーメディア室

西森 年寿 教授〔室長〕
宮本 友介 助教
Spence Zaorski 助教
中尾 朋子 事務補佐員

未来共生イノベーター博士課程 プログラム部門

榎井 縁 特任教授（常勤）
脇阪 紀行 特任教授
MULLER Stephen 特任講師（常勤）
神田 麻衣子 特任講師（常勤）
石塚 裕子 特任講師（常勤）
平尾 一朗 特任助教
鈴木 ひでみ 特任事務職員
伊藤 みち子 特任事務職員（2019年11月まで）
亀岡 美穂 特任事務職員（2019年11月より）
川淵 千恵子 事務補佐員

Ⅱ 活動報告

活動概要の一覧

2019 年度 未来共創センター活動の概要

未来共創センターでは、一年間を通じて様々な「社会とつながる」交流の場づくりを行ってきました。

下記は、2019 年度に実施した活動の実績です。

1 センター主催のイベント →詳細は P9 へ

◆ 1.1 人間科学セミナー

大阪大学人間科学研究科の教員らによるセミナーで、一般にも広く公開しています。

今年度は、第 31 回から第 40 回までの 10 回のセミナーが開催され、教員・学生のみでなく、学外からの参加もいただきました。

日付	タイトル	演者所属	氏名
2019/5/20	Special Needs Education and Perspectives on Human Value in Japan	大阪大学大学院 人間科学研究科 招へい教授	Lynne Nakano 招へい教授 (コーディネーター：大谷順子)
2019/5/30	薬草園における地球と身体とのループ：Planetary Health という共生の方へ	大阪大学大学院 人間科学研究科 グローバル共生学講座	モハーチ・ゲルゲイ
2019/6/20	交通事故はなぜ起こる？どう防ぐ？ ～人間科学から交通安全を考える	大阪大学大学院 人間科学研究科 人間行動学講座	中井宏
2019/6/24	Schools as Community Anchors in Disaster Response and Recovery: Case Studies from the Asia-Pacific.	大阪大学大学院 人間科学研究科 招へい教授	Carol Mutch 招へい教授 (コーディネーター：大谷順子)
2019/7/11	老年学の面白さを伝えたい！ その広がりや深みの魅力	大阪大学大学院 人間科学研究科 人間行動学講座	権藤恭之
2019/10/17	ちがいを価値に 自分らしくチャレンジできる 組織づくり	大阪大学大学院 人間科学研究科 附属未来共創センター	杉原薫子
2019/10/31	博士課程のキャリアパスについて	文部科学省科学技術・ 学術政策研究所	岡本拓也 総括上席研究官
2019/11/21	開いた未来のジレンマ	大阪大学大学院 人間科学研究科 基礎人間科学講座	森田邦久
2019/11/28	私立大学のマネジメント 計画に基づく KGI,KPI とモニタリングに基づく評価 の有効性の検討	関西学院大学教育学部 准教授	江原昭博
2020/1/20	インタビューが映す生・紡ぐ生	大阪大学大学院 人間科学研究科 臨床教育学講座	野村晴夫

◆1.2 まなびのカフェ

参加者とともに語りあう、交流型の学びの場です。教員が外に行くだけでなく、外部のパートナーが大学に来て共にまなぶ場を、気軽なカフェとして実施してきました。2019年度は、箕面市国際交流協会と茨木市生涯学習センター（きらめき）と協働しました。

日付	タイトル	演者所属	氏名
2019/10/14	食べる 学ぶ 世界の保存食 保存の工夫から非常時の活用まで	大阪大学大学院 人間科学研究科 附属未来共創センター	木村友美 イ・ヒョンスク 中川 ナパラウィー
2019/11/28	多文化社会と防災 - 大阪府北部地震を振り返って -	箕面市国際交流協会／ 災害ボランティアラボ	交流型イベント
2019/12/5	まなびのカフェ@いばらき 世界の人々の暮らしを知ろう（アフリカ）	大阪大学人間科学研究科 グローバル共生学講座	杉田映理
2019/12/12	まなびのカフェ@いばらき 世界の人々の暮らしを知ろう（アジア）	大阪大学大学院 人間科学研究科 附属未来共創センター	木村友美

◆1.3 ランチトーク／ナイトトーク

学生主催のイベントです。「表現の自由」「ジェンダー」「実践と研究」「大学教育とは？」など、今注目される話題を中心に大学院生・学部生が話題提供し、熱い議論が繰り広げられました。

日付	タイトル	テーマ	話題提供者	話題提供者の所属分野 (本研究科の大学院生)
2019/7/25	復活ランチトーク	地域、文化、写真、労働者、 貧困、格差、ランチトーク	桂悠介 吉成哲平 サショ・ドリンシェク 安藤歴	共生社会論 D1 環境行動学 M1 比較文明学 D1 共生の人間学 D1
2019/11/19	「見た目問題」無関心 と抵抗、そして連帯	ジェンダー、表現	古怒田望人	哲学と質的研究 D2
2019/12/20	表現@大学	表現の自由	仲田幸司 桂悠介 安藤歴 参加者みんな 栗本英世 牟田和恵	共生社会論 D3 共生社会論 D1 共生の人間学 D1 教員 教員
2020/1/27	実践と研究	社会人院生、実践、現場	ごうじりつこ 寺村晃	哲学と質的研究 D3 地域創生論 M2
2020/2/14	大学の教育	大学教育、学際	井上瞳 ラフマトゥロエワ・ サビーナ・ボヌ 柳田和哉 参加者みんな 三浦麻子 モハーチ・ゲルゲイ	哲学と質的研究 D1 地域創生論 M2 共生の人間学 M1 教員 教員



2 大阪大学オムニサイト協定 OOS →詳細は P19 へ

大阪大学オムニサイト協定 OOS は、人間科学研究科および協定を締結した組織が主体となり、様々な活動・交流を行いました。

◆2.1 OOS 協定

2019 年の新規協定件数：8 件

- ・大阪市教育委員会
- ・ダイハツ工業株式会社
- ・一般社団法人タウンスペース WAKWAK
- ・中銀インテグレーション株式会社
- ・共和メディカル株式会社
- ・愛媛大学社会共創学部
- ・NPO 法人おおさかこども多文化センター
- ・西予市野村地域自治振興協議会



2018 年度までに締結された協定（締結日順）

- ・一般社団法人全国自治会活動支援ネット
- ・一般社団法人全国寺社観光協会
- ・一般社団法人今井町大和観光局
- ・岩手県九戸郡野田村
- ・パナソニック ホームズ株式会社
- ・新安世紀教育安全科技研究院
- ・NPO 法人北いわて未来ラボ
- ・NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク
- ・ジャトー株式会社
- ・NTN株式会社

◆2.2 OOS 関連イベント

日付	タイトル	実施・主催	場所
2019/11/7	たすかんねん実証実験	NTN 株式会社・ 一般社団法人全国自治会 活動支援ネット他	大阪大学 吹田キャンパス他
2019/11/16	防災アプリ救済マップで避難演習 (防災フェア)	一般社団法人 全国自治会活動支援ネット	久宝寺緑地公園
2019/11/19	だれもが参加できる地域の福祉と医療	共和メディカル株式会社	人間科学研究科本館 2F ラーニングコモンズ
2019/12/16	“たすかんねん” ほんまや！～地域資源と 科学技術で安心安全社会の共創をめざして～	一般社団法人地域情報共創 センター（RICCC）	大阪大学中之島センター 佐治敬三メモリアルホール
2020/1/22	日本語指導が必要な生徒のための、 遠隔支援に関する実証実験	NPO 法人おおさかこども 多文化センター	大阪府立 野崎高等学校

◆2.3 OOS センターシンポジウム

日付	タイトル	実施・主催	場所
2020/1/16	未来の共生社会を創るために ～未来共創センターの挑戦～	未来共創センターおよび OOS 協定先	銀杏会館

3 研究事業 →詳細は P24 へ

◆3.1 研究会の運営

2019 年度から、下記の 2 つの研究会をセンター主催で実施しました。
この研究会の活動を通じて、人科内での分野を超えた学際研究を推進し、
共創センター出版のジャーナル『未来共創』の出版につなげることを目的としました。

【A. 共創知研究会（セミナー形式）】

「共創」「共創知」に関わる活動や研究をされている外部の講師に話題提供いただきました。

第一回共創知研究会 レポート

<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/news/190830135000>

第二回共創知研究会 レポート

<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/news/191220162500>

【B. テーマ研究会（勉強会形式）】

テーマを決めて、そのテーマに関心のある人を募集し、固定メンバーで 2 か月に 1 度ほどの研究会を実施しました。2019 年度のテーマは、「インクルージョンと共生」として、7 月 1 日より 4 回実施しました。教育現場、防災・復興、町づくり、介護等の視点から、障がい者、高齢者、外国人など、多様な側面・ニーズを持つ人々を対象に、どのようなインクルーシブの取り組みがなされているか事例報告や比較を通じて、多分野での議論を深めました。その後、研究会のメンバー 5 名が、ジャーナル『未来共創』の特集「インクルージョンと共生」に寄稿しました。

◆3.2 ジャーナル『未来共創』の発刊

これまで第 6 号まで刊行されてきたジャーナル『未来共生学』を引き継ぎ、
名称を新たに、ジャーナル『未来共創』として、2019 年度は第 7 号として発刊しました。

4 教育事業 →詳細は P28 へ

◆4.1 シリーズ人間科学の刊行

◆4.2 『私の一冊』の刊行

◆4.3 English Skill-up Session

5 JICA 大学連携 →詳細は P30 へ

2019 年 7 月より、JICA（国際協力機構）と連携し、タンザニア連合共和国イララ県に学部生・大学院生計 4 名を派遣しました。

6 ラボ事業 →詳細は P32 へ

◆6.1 Ethnography Lab

◆6.2 災害ボランティアラボ

7 その他 →詳細は P34 へ

1. イベント、ワークショップ等

種別	日付	タイトル	演者所属	氏名	場所
ワーク ショップ	2019/7/9	吹田市×未来共創センターコラボ企画「吹田市職員さんに聞いてみよう・やってみよう」	大阪大学大学院 人間科学研究科	岡田千あき 山本晃輔	キャノピー ホール
阪大共創 Day	2019/11/30	大阪大学共創 DAY	大阪大学大学院 人間科学研究科	山本晃輔 渥美公秀 稲場圭信 志水宏吉 ほか、学生約10人	ららぽーと EXPOCITY 光の広場
JICA 大学 連携	2019/12/5	そうだ、タンザニアに行こう！ (JICA大学連携報告会&説明会)	大阪大学大学院 人間科学研究科 附属未来共創セ ンター	岡田千あき ほか	人間科学研究科 2F ラーニング コモンズ
阪神・淡路 大震災 25 年日中 共創シンポ ジウム	2020/1/17	「日中比較からみえてくる 災害ボランティアの意義と 課題」	大阪大学大学院 人間科学研究科 教授 CODE 海外災害援助市 民センター	渥美公秀 吉椿雅道	西宮市民会館
学力格差 全 4 巻 出版記念 シンポジ ウム	2020/1/25	「学力格差に挑む - 家庭・地域・ 学校にできること」	大阪大学大学院 人間科学研究科 附属未来共創セ ンター	志水宏吉 ほか、教員・学生 約20人	大阪ユビキタス 協創広場 CANVAS
映画 イベント	2020/1/31	「福島は語る」上映会	未来共生 プログラム	石塚裕子、ほか	人間科学研究科 106 講義室

2. 出前授業

日付	タイトル	場所	担当教員
2019/6/13	学校紹介・模擬授業 「人間を科学するってどういうこと」	兵庫県立小野高校	山本晃輔
2019/7/22	福井高校「ドリカム」に関連するレクチャー	大阪府立福井高校	山本晃輔
2019/8/28	学校紹介・模擬授業 「人間を科学するってどういうこと」	私立仁川学院高校	山本晃輔
2019/10/4	世界を学ぶー授業への参与	箕面市豊川南小学校	山本晃輔
2019/11/8	世界を学ぶー授業への参与	箕面市豊川南小学校	山本晃輔

3. センターでの常時の取り組み

- ・月2回のカフェ事業（学生相談からの相談などを気軽に話す場づくり）
- ・学部生による「本屋」の設置
- ・写真洗浄会（2020年1月から開始）：これまで計3回実施（共生学系・宮前良平）

1 センター主催のイベント

◆ 1.1 人間科学セミナー

Human Science Seminar Vol. 31 (第31回 人間科学セミナー)

Special Needs Education and Perspectives on Human Value in Japan

2019.5.20 (月)

This talk explores approaches to special needs education in Japan from an anthropological perspective. It considers how ideas about special needs education in Japan reflect changing interpretations of the purpose of education and the role of individuals in society. The talk covers the views of educators who established special education institutions in the early postwar period such as Kazuo Itoga and Kiyo Kitahara. It also considers how contemporary approaches to special needs education reflect changing beliefs about the purpose of education, the relationship of the individual and the group, and the role of individuals in society. The speaker argues that contemporary debates about special needs education in Japan reflect ongoing attempts by different sectors of society to strike a balance between the needs of the individual and the needs of society.



Speaker

Prof. Lynne Nakano

The Chinese University of Hong Kong
大阪大学招へい教授

第32回 人間科学セミナー

薬草園における地球と身体とのループ Planetary Health という共生の方へ

2019.5.30 (木)

動植物と共にこの惑星を生き、その未来を共に創っていきます。しかし環境問題が顕在化する中、人間の活動が地球の気候に与える影響は、こうした生態人類学が追究してきた相互関係を根本的に変えつつあります。食糧不足から大気汚染まで、地球全体の健康と人間の健康の間の切っても切れない関係性を無視できない時期に来ているとも言えます。

医療の領域では、このような時代性を検討する試みにおいて、近年「planetary health」という概念が注目を集めています。本発表では、西日本と北ベトナムでの比較民族誌的な調査から、創薬における人間と植物の相互構成の事例を踏まえ、「planetary health」に関する論争が人間科学にもたらす展開を考察し、さらに共生学としての応答の可能性を探究していきたい。

薬草園を現場とする人類学の研究は、人間の健康が、地球と私たちの身体を他の生き物たちと共に生きるなかでこそ保たれていることを常に思い出させてくれます。したがって、本発表では「planetary health」におかれた知を追求できる特殊な場所である薬草園について紹介します。



講演者

モハーチ・ゲルゲイ
准教授

グローバル共生学講座

第 33 回 人間科学セミナー

交通事故はなぜ起こる？ どう防ぐ？ ～人間科学から交通安全を考える

2019.6.20 (木)

近年我が国では、交通事故件数、交通事故死者数ともに減少を続け、特に死者数は 3,532 人（2018 年）となり、現在の形で交通事故統計が残る 1948 年以降で最少となっている。しかし、幼子が犠牲になる事故やあおり運転に関する報道の過熱ぶりを見ても、交通安全が社会の重要な関心事であることは論を俟たない。大阪大学における交通事故防止研究は、故鶴田正一文学部元教授に端を発し、今日に至るまで脈々と引き継がれている。人間科学部の歴史は言わば交通心理学の歴史でもある。

本セミナーでは、交通事故の発生に繋がる人間の心理的特性について概説するとともに、私が実践している安全教育プログラムの一部を紹介する。

自動運転車が交通諸問題解決の切り札のように思われているところもあるが、その実現はまだまだ先のことであろう。幅広い学問領域（例えば高齢者、女性、外国人、障がい者など）を扱う人間科学という学問が、交通安全にいかに関与できるかを皆さまで考えたい。



講演者

中井 宏 准教授

人間行動学講座

Human Sciences Seminar Series Vol. 34 (第 34 回 人間科学セミナー)

Schools as Community Anchors in Disaster Response and Recovery: Case Studies from the Asia-Pacific.

2019.6.24 (月)

The Asia-Pacific region is the highest disaster-prone region in the world (Ferris & Petz, 2012). As international organisations, national governments and disaster agencies devote more money and energy to disaster mitigation, it is timely to examine research that highlights under-utilised resources. Schools are one such resource. Literature reviews show that while there is literature outlining what schools should do, limited research has been done on the multiple roles schools and school personnel have actually played in assisting their communities post-disaster and much of what is available is anecdotal and fragmented. This paper reports on seven years of research across six Asia-Pacific countries (Australia, New Zealand, Japan, Nepal, Vanuatu and Samoa) and four disaster types (bushfires, earthquakes, tsunami and cyclones). The combined findings are discussed using a conceptual framework that highlights the concept of schools as community anchors – before, during and after disasters.



Speaker

Prof. Carol Mutch

The University of Auckland

第 35 回 人間科学セミナー

老年学の面白さを伝えたい！ その広がりや深みの魅力

2019.7.11 (木)

近年、高齢社会の進展とともに老年学に対する関心が高まっている。しかし、老年学が扱う事象は広く、その全体像をつかむことはベテランの研究者であっても難しい。さらに、若い学生にとって高齢期は先のことなので、興味の対象とはなりにくい。本セミナーでは報告者が現在行っているプロジェクトを紹介しながら老年学の魅力を伝える。

紹介する研究は、百寿者研究、地域疫学研究、そして老年的超越と呼んでいる高齢期のこころの発達に関する研究である。百寿者研究は、2000年に開始した日本人を対象とした東京百寿者研究、全国超百寿者研究、SONIC100研究および、百寿者の国際研究ネットワークのメンバーとしてかかわっているプロジェクトについて紹介する。地域疫学研究は2010年に人間科学研究科を中心として開始した、3000名以上の高齢者が参加するSONIC研究の成り立ち、学際研究としての特徴と成果を紹介する。また並行して行っている、地域在住高齢者の活動についても報告する。

最後に、行動学からのアプローチとして「老年的超越」の萌芽から現状の展開を紹介する。限られた時間の中で研究の詳細を報告することはできないので、報告者がどうして研究を始めたのかという「開始動機」と、どうして現在も続けているのかという「継続動機」から老年学研究の楽しさのエッセンスを伝えることができるかと考えている。



講演者

権藤 恭之 教授

人間行動学講座

第 36 回 人間科学セミナー

“ちがいを価値に自分らしくチャレンジできる組織づくり” 企業における Diversity & Inclusion の取り組み

2019.10.17 (木)

日本企業でダイバーシティの取り組みが始まって約10年。多様な人材が「働きやすい」環境づくりは進みつつありますが、一方で誰もが「働きがい」を感じているのでしょうか。ダイバーシティの本質である、内面的な多様性（価値観、能力、経験等）に注目すれば対象はマイノリティだけではなく、全社員であり、企業においてはその多様性を業務や経営に活かす事が「働きがい」に繋がると考えています。

多様性の一つとしての障がい者、女性等は活動のメインターゲットではありますが、その取り組みを通じて、多数派である男性含めて誰もが、「自分らしく」チャレンジをする為には、どうあるべきなのか。企業人でもある立場より、企業の具体的な取り組みや課題をご紹介しながら、皆さまと共に考えたいと思います。



講演者

杉原 薫子 特任准教授

附属未来共創センター
NTT 西日本 人事部
ダイバーシティ推進室 室長

第 37 回 人間科学セミナー

博士人材のキャリアパスについて

2019.10.31 (木)

本セミナーでは、文部科学省科学技術・学術政策研究所において科学技術人材に関する調査研究に携わっておられる岡本拓也総括上席研究官を招聘し、博士課程修了者のキャリアパスに関する調査結果についてのご講演をいただきます。大学院生のみなさまは今後の進路の検討に、教職員のみなさまは今後の大学としての方針の検討に役立つものと考えます。

なお、本セミナーは、高度副プログラム「大学マネジメント力養成・向上プログラム」が提供する「高等教育論特講Ⅱ（担当：川端亮、齊藤貴浩）」の一つの講義として提供されます。



講演者

岡本 拓也 総括上席研究官

文部科学省科学技術・
学術政策研究所
第1 調査研究グループ

第 38 回 人間科学セミナー

開いた未来のジレンマ

2019.11.21 (木)

本講演では、未来が開いていることを認めるならば、(1) 物理学が閉じていないか、(2) 物理学の法則が時間によって変化するか、のどちらかを受け容れなければならない、というジレンマを論証します。ここで「未来が開いている」とは、未来の状態が現時点では決定していないという意味です。これは、単に予測できないということとは違います。

また、「物理学が閉じていない」とは、非物理的な過程（たとえば心的な過程）が存在して、しかもそれが物理過程に因果的影響を与えるということです（しかしそれを受け容れることは様々な困難が伴うので、通常は受け容れ難い主張です）。この論証は、哲学の予備知識も科学の予備知識もなくとも理解できますが、論証に入る前に、議論の背景を知っていただくために、簡単に時間論のお話したいと思います。



講演者

森田 邦久 准教授

基礎人間科学講座

第39回 人間科学セミナー

私立大学のマネジメント計画に基づく KGI、KPI と、 モニタリングに基づく評価の有効性の検討

2019.11.28 (木)

本セミナーでは、関西学院大学において教学マネジメントに係る取組に関わってこられた江原昭博准教授を招聘し、学生調査や教育の質保証、中期計画および KGI / KPI の策定とモニタリング等、関西学院大学の行うマネジメントについてのご講演をいただきます。

厳然たる大学の理念が存在し、かつ費用を負担する利害関係者との関係性を重視する私立大学がどのようなマネジメントを志向し、また実現しているのかについて理解することは、今後の大学としての方針の検討に役立つものと考えます。



講演者

江原 昭博 准教授

関西学院大学
教育学部

第40回 人間科学セミナー

インタビューが映す生、紡ぐ生

2020.1.20 (月)

研究者はインタビューを調査のために用います。心理カウンセラーは、それを臨床のために用います。前者のリサーチ・インタビューでは、対象者の生 (life) を知ろうとします。後者のクリニカル・インタビューでは、対象者の生に働きかけようとしています。これら二種類のインタビューは、同じインタビューといっても、用途や倫理が異なります。けれども、リサーチ・インタビューであつたとしても、対象者の生や研究者の生が、互いに少なからぬ影響を受けることがあるでしょう。生を映し出していると思っていたリサーチ・インタビューが、実は生に働きかけ、それを紡いでいることもあるかもしれません。

臨床心理学や発達心理学の分野でのクリニカル／リサーチ・インタビューのささやかな経験から、インタビューという方法の可能性についてお話しします。



講演者

野村 晴夫 教授

臨床教育学講座

◆ 1.2 まなびのカフェ

まなびのカフェ × comm cafe

食べる・学ぶ 世界の保存食 保存の工夫から非常時の活用まで

日 時：2019年10月14日（月・祝）14:00～16:00

場 所：comm cafe（箕面市立多文化交流センター 1F）

参加者：27人

主 催：大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター

共 催：公益財団法人箕面市国際交流協会（MAFGA）

講 師：木村 友美（大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター）

イ・ヒョンスクさん（韓国出身）

中川ナパラウィーさん（タイ出身）



未来共創センターは公益財団法人箕面市国際交流協会（MAFGA）と共に箕面市立多文化交流センターにある comm cafe で「まなびのカフェ × comm cafe」を開催しました。世界の保存食について五感を使って学び、非常時の活用等について参加者で考えました。

保存食について学ぶ・食べる

第一部では講師からのミニレクチャーがあり、チベットの長期保存できく主食ツアンパ（ハダカムギの粉）の紹介、ミスカル（韓国で定番の雑穀粉のドリンク）をはじめとした韓国の保存食の紹介、魚の発酵食やエビの砂糖漬けなどのタイの保存食の紹介がありました。チベットのツアンパや、韓国のミスカル、タイの干しエビなどは参加者みなで試食すると、「美味しい！」「不思議な味…」といった感想が飛びかい、会場がにぎやかになりました。

非常食について考える

第二部のワークショップではグループに分かれて保存食の非常食としての活用について考えました。まずは身近な保存食を思いつく限り書きだしました。「梅干」「漬物」といった塩蔵食品や、「甘納豆」「干イモ」などのおやつ感覚で食べられるもの、さらに「カップラーメン」や「レトルト食品」のような加工品など、それぞれの出身地や年代を反映して様々な保存食が挙げられていきます。

次に、災害時の非常食にほしいものはどのようなものか、皆で考えました。「匂いが少ない」「ゴミが出ない」「あたたかい」等のつらいときにこそ欲しいものの特徴が見えてきます。その特徴にあわせて、どの保存食が非常時に私たちを助けてくれそうか、どのような特徴の保存食があるとうれしいのかといったことをまとめていきました。多様な背景を持つ人が協力して取り組むことで新しい発想が生まれたワークショップとなりました。

まなびのカフェ @ いばらき

世界の人々の暮らしを知ろう

日 時：2019年12月5日（木）、12日（木）
場 所：茨木市生涯学習センター きらめき
主 催：大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター
講 師：杉田 映理（大阪大学大学院人間科学研究科・グローバル共生学講座）
木村 友美（大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター）



未来共創センターは茨木市生涯学習センターと共に、「まなびのカフェ@いばらき」を開催しました。アフリカとアジアの地域で研究している教員と、学生、参加者が共に、身近な話題について、わきあいあいと語り合うカフェ形式での実施となりました。第一回は、杉田映理先生のご研究から、アフリカの水衛生を通じてトイレ問題について考える、第二回は、木村友美先生のご研究から資源の限られたヒマラヤ高地の食を通じて、私たちの食のあり方や健康とはなにかを考える会となりました。

アフリカと国際協力 一水とトイレの深い関係

まず始めにアフリカのイメージを聞いてみると、「遠い存在」「民族も多様で、よく分からないイメージ」「大自然、動物」などの声がありましたが、杉田先生の講演でアフリカが少し身近に感じられた会となりました。

杉田先生が、アフリカの水とトイレの問題について紹介し、さらに日本の昔のトイレについてのグループディスカッションになりました。ある参加者の方は、子供のころ「木の板2枚で、ポットトイレだった」と話してくださり、多くの方が声をそろえて言ったのは、「トイレは母屋から遠かった」ということで、暗くて寒いなかトイレに行くのが嫌だったなあという話で盛り上がりしました。住居スペースとトイレを離しているという点は、衛生面や臭い対策などの点からも、必要なことだったようです。昔の学校のトイレから、現代の日本のトイレの大進歩まで、身近な話題だったこともあり話はつきませんでした。それにしても、トイレの話は盛り上がるものです！

フィールド栄養学から考える高齢期の健康 一ヒマラヤ高地の調査から

食と健康の話題は、日々の生活においても関心の高いテーマです。一方で、「何を食べたら健康に良いのか」という問いに対して、栄養学的には簡単に答えられないという例を紹介しました。高齢になると、摂取する食品の多様性が低下して、それが心身の健康と関連するといわれています。しかし、標高4000mを超えるようなヒマラヤ高地に住む人びとは、多様な食品を入手するのは困難です。厳しい高所環境に暮らす遊牧民の食生活や健康に関する調査を写真とともに紹介しながら、老いとはなにか、生きがいや幸福とはなにかを、皆で話しました。チベットの人たちが一番幸せを感じる瞬間は「お祈りをしているとき」でしたが、参加者の皆さんからは「食べているとき！」という声も聞かれました。最後に、日常にあふれる食や健康に関する情報とどのようにつきあっていけばよいか、参加者自身が自分のまわりの情報源についてマッピングをしながら皆で考えました。

◆1.3 ランチトークとナイトトーク

未来共創センターでは2019年度はランチトークを3回と新企画のナイトトークを2回開催いたしました。ランチトークは昼休みに軽食をつまみながらその日のテーマについて参加者みんなでディスカッションする学生中心の企画です。新企画ナイトトークでは教員の方々にもより積極的にディスカッションにご参加頂きました。専門性の深化に伴う研究の細分化は一方で研究室間の垣根を高くしています。ランチトーク・ナイトトークは開放的な空間でのディスカッションを通じた人々の出会いの場を目指しています。そして出会いを通じた新たな可能性の創造を期待しています。



アラスカが教えてくれたこと一写真家 星野道夫との出会いに始まって

吉成 哲平 (環境行動学 M1)

ランチ
トーク
1

寄せ場のインターナショナル

サショ・ドリンシェク (比較文明学 D1) × 安藤 歴 (共生の人間学 D1)

日時: 2019年7月25日(木) 12:00～14:00 場所: インターナショナルカフェ

今年最初のランチトークは2本立てでした。1つ目は写真家星野道夫を通じてアラスカに魅せられた吉成哲平さんの美しいプレゼンテーションです。中学生の時に英語の教科書で星野道夫を知った吉成さんは星野を追いかけるように写真を撮り、アラスカへと留学に旅立ちました。吉成さんは写真で、そして言葉で、アラスカの自然と文化に対する感動を伝えてくれました。自然と人間のあいだ、そして文化と文化のあいだをつなぐものとしての写真の力とそして何より吉成さんの真摯さは参加者の胸を打つものでした。



2つ目はサショ・ドリンシェクさんと安藤歴さんによる釜ヶ崎についての現状報告と将来についての問題提起です。日雇い労働者の街から高齢の単身者が多く住む街へと釜ヶ崎は急速に変化しつつあります。その中であいりん労働福祉センターの建て替えを巡る対立など、単純に割り切ることのできない課題が続出しています。釜ヶ崎で活動する人科の学生・教員が街とそこに生きる人々の将来について、それぞれの経験を背負って語り合いました。

ランチ
トーク
2

「見た目問題」——無関心と抵抗、そして連帯 PROBLEMS OF LOOKISM : IGNORANCE, RESISTENCE, AND SOLIDARITY.

古怒田 望人 (哲学と質的研究 D2)

日時: 2019年11月19日(火) 12:00 ~ 13:00

場所: インターナショナルカフェ

古怒田さん(いりやさん)は現代思想研究と並行してジェンダー活動家として積極的に発信をしています。いりやさんは様々な話をしました。その中で、街行く人の多くが困っているいりやさんに対して全く無関心であるのに、しかしネット上では多くの匿名の人々がSNSを通じて誹謗中傷の言葉をぶつけてくるという話は印象的でした。無関心と暴力を乗り越える連帯を、私たちは創らねばなりません。



ナイト
トーク
1

表現@大学



栗本 英世、牟田 和恵
仲田 幸司、桂 悠介
安藤 歴、参加者みんな

日時: 2019年12月20日(金) 18:00 ~ 20:00

場所: インターナショナルカフェ

大学における表現の自由を考える会を実施したいという声を受けて、新企画ナイトトークを栗本先生、牟田先生、仲田さん、桂さん、安藤さん、そして参加者みなで開催しました。大学では表現をめぐる様々な問題が起こっています。大学はどのような場所であるべきか、人々の声をどのように伝えていくのか、参加者それぞれが意見を語り合うことで問題とアプローチ方法が具体的にになっていきました。



ナイトトークはランチトークよりも長い時間をかけて教員と学生が研究分野の垣根を越えて議論します。誰かがリーダーになって話すのではなく、そこに集まったみなで考える会です。だからあえて「参加者みんな」と書いています。会場では緊張感のあるディスカッションが展開され、参加者からも好評でした。そして先生方の真摯な姿は学生の印象に残りました。

ランチ
トーク
3

実践と研究

ごうじ りつこ (哲学と質的研究 D3)
寺村 晃 (地域創生論 M2)



日時：2020年1月27日(月) 12:10～12:50

場所：インターナショナルカフェ

社会人大学院生として様々な境界を飛び越えてきた方々とのランチトークです。ごうじさんは助産師、寺村さんは作業療法士としての豊富な経験を持ち、現場で抱いた危機感を胸に人科に飛び込みました。そして様々な困難を乗り越えてそれぞれ博論／修論を提出されました。実践の現場で求められているもの、研究の立場、実践と研究の相互効果など、興味深い話がどんどん続いていきました。実践と研究の現場を巡るランチトークは今後も続けていきたいと思っています。



ナイト
トーク
2

大学の教育

三浦 麻子、モハーチ・ゲルゲイ、井上 瞳
ラフマトゥロエワ・サビーナ・ボヌ、柳田 和哉
参加者みんな

日時：2020年2月14日(月) 18:00～20:00 場所：インターナショナルカフェ

教科で活動する私たちにとってもっとも身近なものです。しかし、「教育」や「学際性」を巡るそれぞれの経験は分野や立場によって相当に異なっていました。お互いの発言を一生懸命聞いて応答するのですが、抱えている問題意識はなかなか伝わらず、そして伝わっても意見は対立します。とても体力が要る対話でした。容易に答えは出ませんでした。参加者それぞれ大学の教育や学際性について考えるべきポイントをいくつか見つけることができました。



多くの学生、教職員の皆様のご協力のおかげでランチトークとナイトトークは開催されてきました。これからもみなさんの生を受け止める新たな出会いの場を目指してますます積極的に活動していきたいと思っています。こんなことをしてみたい、あんなことをしてみたい、みなさんの面白いアイディアから思いもよらなかった未来を創っていききたいのです。

2 OOS

OOS（大阪大学オムニサイト）は、2017年4月からスタートしました。大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センターのプロジェクトのひとつで、支え合う社会、共生社会を創造していくための新たな共創の仕組みです。産官社学連携により、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社团・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」を支援、活用しています。

◆2.1 OOS 協定

2019年度は新たに8件の協定が結ばれ、様々な活動が実施されました。

大阪市教育委員会
ダイハツ工業株式会社
一般社団法人タウンスペース WAKWAK
中銀インテグレーション株式会社
共和メディカル株式会社
愛媛大学社会共創学部
NPO 法人おおさかこども多文化センター
西予市野村地域自治振興協議会



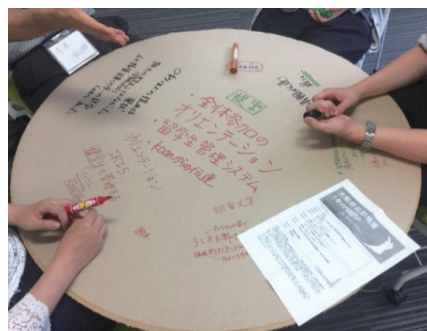
◆2.2 OSS 関連イベント

活動報告 1

大阪府北部地震 1 年のつどい

2019年7月1日、大阪大学大学院人間科学研究科北館2階ラーニングコモンズにて、大阪府北部地震1年のつどいを開催しました。本会は、2018年6月18日に発生した大阪府北部地震を機に立ち上がった有志の会「つっぱり棒の会」主催で行いました。つっぱり棒の会には、大阪大学人間科学部・大学院人間科学研究科の学生、院生、教員をはじめ、OOS協定先のNPO法人日本災害救援ボランティアネットワークの職員も参加し、2018年の10月より、月1回ほどの会議を通じて議論を重ねてきました。地震発生から1年という節目に、発災当時お世話になった箕面市国際交流協会や地区防災委員、吹田市社会福祉協議会の職員をはじめ、近隣の地域の方々との今後の災害に向けた連携を目指し、他大学の教員や災害ボランティアサークル「すずらん」の学生など、計30名を超える参加者が集まりました。

(代表：人間科学研究科・渥美公秀)



活動報告 2

大規模災害時の安心・安全の独立電源装置「たすかんねん」による 「拠点間長距離無線伝送実験」

2019年11月7日、OOSパートナーであるNTN株式会社・一般社団法人全国自治会活動支援ネットを含む「ITを用いた防災・見守り・観光に関する仕組みづくりの共同研究」による「拠点間長距離無線伝送実験」を行いました。

今回の実証実験は2017年から、大阪大学と一般社団法人全国自治会活動支援ネットや企業との共同研究として取り組んできたものです。地域の安全・安心・見守りの取り組みをより一層進めていくために、大阪大学吹田キャンパス内に風力発電、太陽光発電、蓄電池、通信、カメラといった機器を備えた独立電源装置の実験機を3台設置し、実験・内部検証を行ってきました。今回の実証実験は、吹田キャンパスを被災地と想定し、人間科学研究科周辺の仮想被害状況を、人間科学研究科屋上から工学研究科棟屋上を経由させ、大阪大学グローバルビレッジ（2020年10月オープン）近くの吹田市立津雲台小学校（想定被災地外・救援本部）まで長距離無線伝送しました。

（代表：人間科学研究科・稲場圭信）



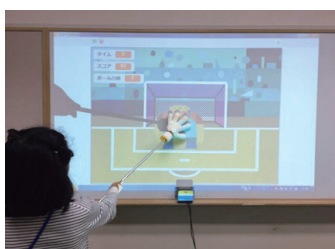
活動報告 3

子どもや教育を切り口にして、楽しい活動を組み立てていく

ジャトー株式会社と大阪大学の教育関連分野の教員らとともに、「JOINT プロジェクト」として、これまでに4つのプロジェクトを実施しました。まず一番目は、学校現場におけるプログラミング学習をテーマにして実施されたものです。これはジャトー株式会社のAir Touch Sensorという製品を用いたもので、子どもたちは、自分たちの作ったゲームを大きく身体を動かしながら体験することができます。講師は、JOINT プロジェクトのメンバーと、教育工学研究室の学部生14名です。子どもの豊かな発想で作られたゲームをモニターに投影して、二日間にわたって教室を開きました。二番目に、キャリアエデュケーションとして、ジャトー株式会社の従業員さんのご家族を対象に、その子どもさん12名を招待して、お父さんの職場を体験してみようというイベントを実施しました。その他にも、地域の学習教室への参加や、万博をテーマにして子供たちと「未来の街」を描くイベントなどを実施しました。

OOS協定を機に、これからも「共に活動する場」として、子どもたちや大学生が主体的・対話的に学ぶことができる環境や教育プログラムの開発等を行う計画です。

（代表：人間科学研究科・志水宏吉）



活動報告 4

日本語指導が必要な児童・生徒のための遠隔支援に関する実証実験

2020年1月22日、未来共創センターでは、NPO 法人 おおさかこども多文化センターとともに、大阪府立野崎高等学校の協力のもと日本語指導が必要な児童・生徒のための遠隔支援に関する実証実験を実施しました。

大阪大学大学院人間科学研究科では、学内の留学生に協力いただき、外国人生徒の支援をおこなってきました。ところが、外国人生徒は大阪府内各地で生活しています。そのため、(1) 遠隔地への対応や (2) 少数言語など話者が限られた児童・生徒への支援が難しい状況にありました。

そこで NPO 法人 おおさかこども多文化センターの協力のもと、遠隔地での児童・生徒支援の実験を行いました。当日はタブレット型パソコンで、野崎高校と人間科学研究科をつなぎ、ビデオ会話やテキストの書き込みなどを行いました。

(代表：人間科学研究科・榎井縁)

(実験の様子は 2020 年 2 月 2 日 朝日新聞朝刊でも紹介されました)

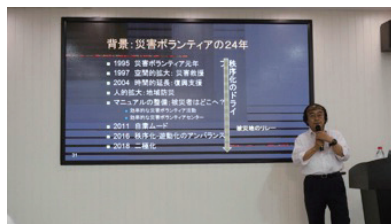


活動報告 5

中国四川省成都市新安世紀教育安全科技研究院における「中日防災安全技術研修プログラム」

2019年6月17日から23日にかけて、中国四川省成都市にある教育部デジタル化学習サポート技術センターで「中日防災安全技術研修プログラム」が開催されました。本プログラムは、OOS 協定先の新安世紀教育安全科技研究院の主催、大阪大学人間科学研究科附属未来共創センターの共催で行われました。

本研修は、防災、教育、安全工学、医学、心理学、社会学、その他多くの分野を網羅しており、国内外の経済発展の状況や、法律、規制に基づき、理論と実践を組み合わせることで学生とともに防災・減災について学びました。研修プログラムは、新安世紀教育安全科技研究院だけでなく、四川師範大学、成都師範学院、四川省心理学会、成都英尼安全技術株式会社からの複数の実践者らが講師となり、また日本からも、CODE 海外災害援助市民センター、NPO 法人北いわて未来ラボの数名が講師として参加しました。研修プログラムの受講生は、中国の政府、学校、社会組織、民間企業など様々な領域から合わせて 22 名が参加し、本学の教員・学生も参加しました。



(代表：人間科学研究科・渥美公秀)

その他、多数の活動報告がウェブサイトに掲載されています。

<http://www.hus.osaka-u.ac.jp>



◆ 2.3 OOS センターシンポジウム

未来共創センター公開シンポジウム 第2回

「未来の共生社会をつくるために ―未来共創センターの挑戦―

2020年1月16日

◆ プログラム

第一部／公開シンポジウム

【開会挨拶】川端亮（大阪大学大学院人間科学研究科研究科長）

【キーノートトーク】栗本英世（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

「共創知とはなにかー人間科学研究科教員・学生の実践から考える」

【取り組み事例の紹介とディスカッション】

新安世紀教育安全科技研究院／ジャトー株式会社／ダイハツ工業株式会社／

特定非営利活動法人北いわて未来ラボ／

モデレーター：稲場圭信（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

【閉会挨拶】志水宏吉（大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター長）

第二部／ワークショップ

◆ 参加者

企業・NPO・自治体・大学関係者等を中心に110名

◆ 参加団体

一般社団法人全国自治会活動支援ネット／一般社団法人今井町大和観光局

岩手県九戸郡野田村／パナソニックホームズ株式会社

新安世紀教育安全科技研究院／（特）北いわて未来ラボ

（認特）日本災害救援ボランティアネットワーク／ジャトー株式会社

NTN株式会社／大阪市教育委員会

ダイハツ工業株式会社／一般社団法人タウンスペース WAKWAK

中銀インテグレーション株式会社／共和メディカル株式会社

◆ 内容

第一部の公開シンポジウムでは、共創知の暫定的な定義についての説明が行われました。共創知とは「研究者と現場（フィールド）の当事者とのあいだのかかわりあい、相互作用のなかで生成される実践的な知」であり、そうした共創知の現場における研究者は、つなぎ役・媒介者としての役割を果たすというものです。

つぎに、OOSのパートナーからそれぞれの取り組みを発表いただきました。その内容は多様であり、災害に関するもの、情報技術に関するもの、健康に関するものなどです。OOSパートナー団体からは「OOS協定を通じて、新しい交流が生まれた」「これまでになくアイデアが生まれた」など、OOS協定を通じて芽吹き始めた「共創知」に関わるコメントを頂きました。



第二部のワークショップにおいては、参加者が8チームに別れ、SDGsカードを使用したワークショップを行いました。1つのチームには、様々な組織からの参加者が混在しています。企業取締役、行政職員、NPOスタッフ、大阪大学教員・学生。皆で設定した課題を議論し、学生の取りまとめ役がそれら参加者の意見を調整しました。参加者は、配布されたSDGsカードを手し、班のメンバーが持つ多様な資源を組み合わせ、どのような社会改善を行うことが可能かを話しあい、班ごとにその結果の発表を行いました。



＜ワークショップに参加した学生の声＞

私たちの班には、まちづくりを考えている方、高齢者の今後の生活について考えている方、震災からの復興について考えている方、精神健康の向上について考えている方、教育を受ける機会の平等な提供について考えている方など、多岐にわたる背景を持つ方々がいらっしゃいました。私たちは“まちづくり”をテーマとしてそれぞれの意見を共有し合ったのですが、その中でも「孤独死は高齢者の問題ではなく、“孤独”の問題である。住民の間につながりがあり、信頼関係が築けていれば孤独死は防げるはずである」という意見が印象的でした。孤独の問題は、高齢者に限らず災害後や精神疾患、教育といった領域とも通ずる問題であり、まちづくりを行う際には様々な分野に目を向けて問題の解決を図ることが大切であると感じました。



大阪大学人間科学研究科
未来共創センター

大阪大学オープンコミュニティ
Osaka University Open-Community

**未来の共生社会をつくるために
—未来共創センターの挑戦—**

2020年1月16日(木) 13:00~15:00 (12:30開場)
会場：大阪大学銀杏会館3階(阪急電鉄・三和銀行ホール)

大阪大学人間科学研究科未来共創センターでは、2017年4月より、OOS(大阪大学オープンコミュニティ)を開創しました。OOSは、未来共創センターのプロジェクトとして、産学官の様々な連携団体(OOSパートナー)と共に、安心・安全・共生社会を創出していくことを目指しています。このたび、OOSで得た知見を共有するためのシンポジウムを開催いたします。本シンポジウムでは、「未来の共生社会を創出するために」をキーワードとして、この2年間の取り組みを振り返るとともに、パートナー団体相互の交流を促進し、「共創知」創出のための場づくりを加速させることを目指します。

プログラム

- 開会挨拶 (13:00~13:10) : 川藤 亮 (大阪大学人間科学研究科研究科長)
- キーノートトーク (13:10~13:50) : 栗本 亮世 (大阪大学人間科学研究科教授)
- 「共創知」とはなに? 人間科学研究科教員・学生の実践から考える
- OOSパートナーとの共創・取り組み事例の紹介とディスカッション (13:50~14:50)
- 新大阪駅地区安全共創研究センター
ジャトー株式会社
特定非営利活動法人、北いわて未来ラボ
ダイハツ工業株式会社ダイハツ保険センター
モデレーター：飯嶋 圭信 (大阪大学人間科学研究科教授)

主催：大阪大学大学院人間科学研究科未来共創センター
定員：120名
参加費は無料；申し込み不要
お問合せ先：mirai-kyosothus.osaka-u.ac.jp

3 研究事業

◆ 3.1 研究会の運営

第一回共創知研究会

大学が野に出るとはということか ～フィールドから生まれる共創知～

日 時：2019年7月19日 16:30～18:00
場 所：大阪大学大学院人間科学研究科 ラーニングコモンズ
参加者：27人

講師 竹川 大介
北九州市立大学文学部
人間関係学科 教授

未来共創センターは今年度より共創知研究会を立ち上げました。第一回の研究会では、人類学者であり、地域おこしや演劇など様々な活動をされている北九州市立大学の竹川大介先生を講師にお招きし、「大学が野に出て地域と交わること」による創発の可能性についてお話いただきました。

フィールドワーク教育によって創発されたもの

地域との関わりの背景に「学問」は不可欠であり、竹川先生のゼミに所属する学生たちには地域から学ぶスタイルのフィールドワークを様々な実践されてきたということが紹介された。屋根裏博物館、北方シネマ、みつばち倶楽部、アートプロジェクト、「縄文稲作」や酒の醸造、大学に植えられているヤマモモを利用した大学発ブランドの製作など、たくさんさんの成功事例が紹介されたが、なかでも旦過市場の「大學堂」の取り組みは秀逸である。学生たちは、バイトをするよりも面白いと言い、自ら新しいものを創りだしていく。Incentive（外発的動機づけ）ではなく内発的なモチベーションを大事にしている。野研のフィールドワークの教えのなかで、互酬性は、時間に対する対価であり、学生たちもプロの意識をもって真剣にプロジェクトに望んでいる様子が紹介された。常識や社会技能を学ぶのではなく、常識を壊すところ（フィールド＝制度の外にでること）が重要であるというメッセージが印象的であった。



質疑応答・ディスカッションを通じて



講演後、学生から「プロジェクトで失敗した経験」や、「テーマはどのように見つけるか」といった質問があがった。竹川先生からは、ミツバチ・プロジェクトも当初はうまくいかなかったという事例を紹介いただき、失敗を恐れず、テーマは現場でニーズにそって見つけていくものというコメントをいただいた。「現場から、共創知が生まれた経験」について、旦過市場での大學堂の運営から生まれた「大學丼」についてふれ、「予期しなかった知見が別の形で

たちあがっていく」プロセスを紹介いただいた。また、大学の制度のなかでプロジェクトを実施・継続する工夫や、SNSなどのメディアの活用による広報についても多様なご経験にもとづくコメントが聞かれた。様々な成功事例が紹介されたが、これは特異な「名人芸」というわけではなく実際にできることで、他の先生方にも参考にさせていただきたいとの竹川先生の熱いメッセージとともに会を閉じた。

◆外部リンク：旦過市場『大學堂』<https://www.daigakudo.net/>

第二回共創知研究会

阪神・淡路大震災 25 年企画 災害ボランティアから見てきた大切なこと とは？

日 時：2019 年 12 月 6 日（金）15:00 ～ 17:00

場 所：大阪大学大学院人間科学研究科
インターナショナルカフェ

参加者：17 人

演者
村井 雅清
被災地 NGO 協働センター顧問
渥美 公秀
未来共創センター副センター長

第二回共創知研究会は阪神・淡路大震災 25 年企画として、この 25 年間災害救援ボランティアとして世界各地で活動されてきた村井雅清さんにお話をいただきました。

聞き手は同じくこの 25 年間ボランティア活動と研究に精力的に取り組んできた副センター長の渥美公秀教授です。対談式で行われたこの研究会の一部を紹介します。



被災者の懐に入り込むボランティア

今の日本では被災地の社会福祉協議会が開設するボランティアセンターのボランティアコーディネーターを中心に組織化された災害ボランティア支援が行われているのが定型のようです。しかし、ボランティアコーディネーターは被災者が本当に求めていることに目を向け、耳を傾けるのではなく、ニーズ表ありきでボランティアを機械的に割り当てようになっている現状があると、村井さんと渥美教授は問題視しています。

被災者の懐に入り込み、本当に困っていることや求めていることを理解すること、そしてピオ 11 世の提唱した補完性の原理に従って被災者の自由を尊重しながら支援していくこと、それがボランティア支援にとって大事なのです。

初心者もどんどん行けるように

阪神・淡路大震災の際、多くがボランティア初心者でした。自分で考えて行動してきたころから活動が続けている村井さんは、近年流布している、初心者は現場を混乱させるから十分な準備もせずに被災地に行くべきではないという言説に強い危機感と憤りを覚えています。

経験豊富でよく準備したボランティアだけが求められているわけではありません。十人十色の多様なボランティアが現地に入って、困っている人たちに会って、助けていけばよいのだと村井さんは言います。

共創について

村井さんは専門家のボランティア化の必要性を繰り返し語ります。専門家としての役割にこもってしまうのではなく、ボランティアとして被災者に必要な行動が柔軟にできるようになることが求められています。

ボランティアにとって一番大切なことは被災者と向き合って懐に飛び込み、共に語り合い、考えていくことです。銭湯に行くことや居酒屋で働くことのような市井の人々の本音が聞ける環境に親しむことこそが災害ボランティアのための最大のトレーニングであると村井さんは考えます。市井の暮らしとそこに現れる本音に向き合うこと、ここからが共創知が生まれてくると思います。ただし専門家によるある種の翻訳装置が不可欠ではないでしょうか。

◆3.2 ジャーナル『未来共創』の発刊

未来共創センターでは、第6号まで刊行されてきたジャーナル『未来共生』を引き継ぎ、名称を新たに、ジャーナル『未来共創』として発刊しました。未来共創センターに編集事務局を構えて、初めての刊行となります。本号では査読論文3本、特集論文8本、報告3本、書評3本、エッセイ4本が掲載されることとなりました。

ジャーナルの名称に掲げた「共創」については、特集1「共創・共創知とはなにか」で、栗本英世先生と2名の大学院生により、大阪大学の「共創」の取り組みの歴史から、共創の思想や事例、そして人間科学が目指すべき「共創」が考察されています。また、特集2では、今年度からセンターで立ち上げた研究会をもとに「インクルージョンと共生」をテーマとしましたが、防災、まちづくり、障害者、高齢者、外国人教育などについて、多分野の教員と学生からの原稿が揃いました。また、「インクルージョンと共生」という共通のテーマで、それぞれの分野での課題における共通点や相違点について、筆者らで語り合った「座談会」も掲載されています。

◎目次

『未来共創』発刊にあたって 渥美公秀 …… 001

《特集1》共創・共創知とはなにか

人間科学型の共創および共創知を目指して

栗本英世 …… 003

創造から共創へーライブニッツ・九鬼・中井の哲学から

織田和明 …… 029

共創の事例と概念的検討

八木景之 …… 049

《特集2》インクルージョンと共生

防災第3世代のインクルーシブ防災とは

渥美公秀 …… 067

まちづくりとインクルージョンー「小さな声」による

復興まちづくりを通じて

石塚裕子 …… 083

超高齢社会における孤食と共食ーソーシャル・インクルー

ジョンの観点から

木村友美、野瀬光弘、松林公蔵 …… 099

知的障害者にとっての居場所と地域コミュニティー

フィリピン農村部のある事例から

寺村 晃 …… 119

インクルーシブな教育と葛藤ー大阪の民族学級の事例から

山本晃輔 …… 135

座談会 インクルージョンと共生をめぐる …… 152



ジャーナル『未来共創』の全原稿はこちらからお読みいただけます。

<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/journal>



《論 文》

コンヴァージョン研究を通じた共創の可能性 ―日本の主流
社会とイスラームの関係を捉える出発点として

桂 悠介 …………… 161

外国人生徒の進学システムに関する比較研究 ―神奈川県と
大阪府の特別校の分析から

石川朝子、榎井 縁、比嘉康則、山本晃輔 …… 193

日本における英語授業に対する満足度 ―留学生による 9 年間
の授業評価アンケートの分析を中心に

中野遼子、伊藤 駿、近藤佐知彦 …… 221

《未来共生プログラム コミュニティ・ラーニング報告》

東北フィールドワークと野田村 ―大阪大学の秘められた宝

澤村信英 …… 241

村の誇りを育む ―震災から 9 年目を迎える

野田村における新たな復興の在り方 …………… 244

7 年目の野田村フィールドワークを終えて

渥美公秀、石塚裕子、山本晃輔 …… 275

《報 告》

大阪府北部地震における災害ボランティアの共創―

学生を中心とした「つっぱり棒の会」と「1 年のつどい」

寶田玲子、置塩ひかる、王 文潔、山本菜理 …… 278

中国におけるアフリカ人学生の留学動機、生活課題、

就職意識 ―廈門大学の英語コースを事例として

羅 方舟 …… 296

《書 評》

後藤晴子『老いる経験の民族誌―南島で生きる〈トシヨリ〉の
日常実践と物語』

富安皓行 …… 316

額賀美紗子他編『移民から教育を考える ―子どもたちを

とりまくグローバル時代の課題』

大川ヘナン …… 320

橋本憲幸編『教育と他者―非対称性の倫理に向けて』

山口真美 …… 324

《エッセイ》

共生と共創

志水宏吉 …… 328

写真を洗う指

宮前良平 …… 332

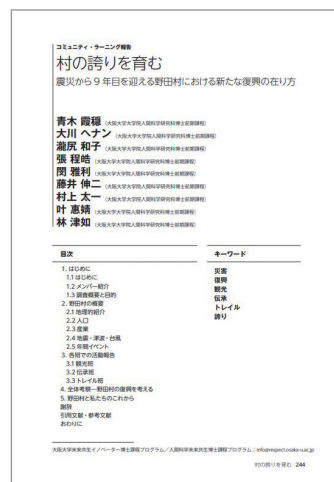
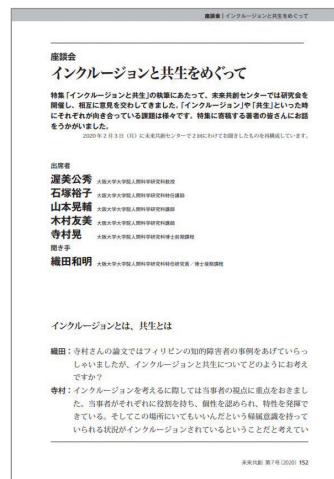
往還しなかった人

大川ヘナン …… 336

往還する青年のその後

山本晃輔 …… 339

編集後記 …………… 345



4 教育事業

◆4.1 シリーズ人間科学の刊行

人間科学研究科附属未来共創センターが中心となり、人間科学にまつわるテーマを多分野の教員で共に執筆した書籍が「シリーズ人間科学」である。2017年3月に第1巻『食べる』を、2018年には第2巻『助ける』、第3巻『感じる』を、大阪大学出版会から刊行した。「シリーズ人間科学」は人間科学部設立当時からある「人間科学とは何ですか？」という疑問への、現時点における私たちからの回答の一つである。2019年度は、第4巻『学ぶ・教える』、第5巻『病む』を刊行した。内容は下記のとおりである。



シリーズ人間科学 4

学ぶ・教える 中澤 渉 野村 晴夫 編

◎内容紹介

「学ぶ」行為は、人が生まれ環境に適応する過程であると同時に、より主体的に、特定の知識やスキルを獲得しようと取り組む行為でもある。そして、「教える」人が介在することで、学びが促進され、また逆に「教える」ことで「学ぶ」こともある。学ぶ・教える場は学校に限られず、家庭、地域コミュニティ、就業、日常的な他者との相互行為など、様々な場が想定される。本書では実験、フィールドワーク、ドキュメント分析、統計分析、比較研究、臨床的アプローチといった様々な人間科学の領域から「学ぶ・教える」に切り込むことで、人間の本性を理解するための多面的な見方とその魅力を提示する。

◎目 次

第1部 日常生活における学び

- 第1章 乳幼児期における社会的コミュニケーションの学び
- 第2章 ジェンダーを学ぶ—性別子育てのカリキュラム
- 第3章 経験から学ぶ脳—学習と記憶の神経科学
- 第4章 対話と沈黙の往還による学び

第2部 学び、教える場としての学校

- 第5章 外国の教育から学ぶ
- 第6章 発展途上国の学校と学びの成果
- 第7章 学校では何を教え、何を学ぶのか—学校教育と職業世界の関係性
- 第8章 学校で教えるということ—教師の仕事とその特殊性

第3部 教えることの理論と実践

- 第9章 交通安全を教える・学ぶ
- 第10章 「創造性」をどう伸ばすのか
- 第11章 「うまく教える」方法はどこまで知ることができるか

◎内容紹介

「病む」にまつわる人間科学の各アプローチにより、人間と人間社会にとっての普遍的な問題としての「病むこと」の意味を見出す。医学、哲学、霊長類学の立場から病むことの意味、生きることとの関連について論じた上で、臨床心理学、臨床哲学、社会福祉学、医療人類学の立場から様々な治療や癒やしの制度について、それらが「病」や社会にとって持つ意味について論じる。さらに、人類学と社会学の立場から、「病むこと」と社会の間に生じる様々な関係、社会における「病氣」の意味について論じることで、「病むこと」とそれに向けられる社会制度と社会のまなざしが、人間社会における普遍的で不可分な重要性をもつことを明らかにする。

◎目 次

第1部 群れ（社会）の中で

- 第1章 傷ついたサル、障がいを持ったサルの暮らし
- 第2章 病と生きる― 病と生の哲学的分析
- 第3章 病むことの多様性と治ることの斉一性について

第2部 治療と癒し

- 第4章 「病」とコミュニティ 超高齢社会の包括ケアという新たな挑戦に向けて
- 第5章 病の語りと心理療法
- 第6章 薬と共に生きる― 錠に詰め込まれた世界

第3部 「病」へのまなざし

- 第7章 病のイメージ「肥満」は病気ですか？
- 第8章 人はなぜ病者の物語に感動するのか
- 第9章 病と老化― 正常と異常の境界線
- 第10章 死と病

◆4.2 『私の一冊』の刊行



人間科学研究科の教員が、学生に読んでもらいたい本を一冊ずつ紹介する『私の一冊』を作成し、学生に配布した。私の一冊は、必修科目「人間科学概論」で使用され、学生たちは掲載された書籍を選んでレポートにまとめて授業で発表した。本を通じて学生と教員がつながるきっかけとなった。

◆4.3 English Skill-up Session（国際学会海外派遣報告会）



教育改革推進室の主催で、海外での国際学会発表や研究交流のためのプレゼンテーションの練習を、事前セミナー・プレFDとして実施した。参加学生たちは、国際学会をイメージし、英語で自身の研究について発表を行った。また、英語での質疑応答の場を設けることで、発表者だけでなく参加者の英語力向上を図ることを目的とした。教員らも多数参加し、発表の仕方や質疑への対応に関するフィードバックが行われた。

5 JICA 大学連携

人間科学研究科で中期目標・計画として掲げられていた「国際インターンシップ・ボランティア」の拡充、また、国際性の涵養、フィールドでの教育機会の充実の観点から、未来共創センターを中心に、2017年度から、学生の海外への派遣を検討し、準備を重ねてきた。JICA と大阪大学連携事業として 2018 年度から派遣学生の選考や手続きを行い、2019 年度に初めての派遣が実現された。初年度となった 2019 年度は、タンザニアの経済都市ダル・エス・サラームのイララ地区教育課に、大学院生 2 名、学部生 2 名の計 4 名が派遣された。活動内容は、以下のとおりである。

【 JICA 大学連携ボランティア ワーキンググループメンバー 】

岡田 千あき 准教授（未来共創センター・教育学系）、中野 良彦 准教授（未来共創センター・行動学系）、白川 千尋 教授（社会・人間学系）、杉田 映理 准教授（共生学系）、木村 友美 講師（未来共創センター）

参加学生からの報告 ～タンザニアでの公衆衛生活動～

〈参加学生のプロフィール〉

- ・服部 貴紀
大阪大学大学院人間科学研究科、教育環境学講座、
博士前期課程 2 年生
- ・中井 隆斗
大阪大学大学院人間科学研究科、教育環境学講座、
博士前期課程 1 年生
- ・大川 和愛
大阪大学人間科学部、国際協力学講座 4 年生
- ・谷本 帆乃夏
大阪大学外国語学部外国語学科、スワヒリ語専攻 3 年生



活動期間は、服部貴紀が先に現地に赴き約 1 か月半（2019/7/24-9/7）、残る 3 名が約 1 か月（2019/8/8-9/7）の短期間で、公衆衛生隊員として活動を行いました。現地の小・中学校で保健体育科目（公衆衛生知識・運動等）があまり行われておらず、生徒の健康増進や公衆衛生知識の普及を目的とした活動が要請されました。

【 活動先の現状 】

活動先は、小学校 2 校、中学校 2 校、そして孤児院 1 ヶ所でした。小学校では PDS（Personal Development and Sports）という科目として座学はしっかり行われていた一方で、体育の実践は行われていませんでした。また、活動を行う上で生徒の人数に対してグラウンドなどの設備、ボールなどの道具が不足している、着替えがない、気温が高い、保健体育科目に関する教師の知識が不足しているといった課題がありました。

【活動内容】現地の現状を受けて以下の活動を行いました。

活動① 手洗い指導

手を用いて食事をする文化を意識し、実用性や持続性といった観点から「手洗い」というテーマを選びました。中でも手洗い歌を用いた正しい手洗いの普及は全活動先で行いました。更に中等学校では、パンを用いて手の汚れを検証する実験を行い、手洗いの必要性を伝えることができました。



活動② 運動指導

派遣期間全体を通し、各学校において運動指導を行いました。従来の学校カリキュラムでは子どもたちの運動の機会が限られているため、運動によって児童・生徒の健康増進を図ることを目的としました。設備がいない遊びや、笛やボールを使ったレクリエーションを行いました。



活動③ 公衆衛生ワークショップ

派遣期間の終盤 Mchanganyiko 中等学校で、公衆衛生ワークショップを行いました。代表として6名のクラスリーダーに参加してもらいました。公衆衛生について幅広い視野を持って考えることを目的とし、ディスカッションや今回のプログラムについてフィードバックを行いました。

ディスカッションでは、健康的な暮らしのための政府の責任に言及するクラスリーダーたちの深く考えられた発言に驚かされました。



活動④ 歯磨き指導

派遣期間の終盤に孤児院 House of Blue Hope にて歯磨き指導を実施しました。画用紙で作った歯ブラシやポスターといった教材を用いて、歯磨きの重要性や具体的な方法を説明しました。



【活動の成果】

41 回の訪問のうち、34 回指導を行い、のべ参加人数は 2653 人でした。活動先の先生および生徒からのフィードバックでは、「子どもたちはスポーツをする機会が少ないため、とても楽しんでいた」また「手洗いの重要性は現地の先生方も教えている中で、日本人であるあなたが指導したことによって、子どもたちに大きな影響を与えることができた」とも話してくださいました。一方で、①現場の把握の不足②ニーズ調査の不足③コミュニケーションの課題④学生の専門性や経験の不足といった課題も見つかりました。

来年度はコロナウイルスの影響により派遣も未定ですが、今後の展望としては、今回の派遣で把握できた現場の状況を後輩達と共有し、より相手のニーズに合った活動が継続されることを願っています。

6 ラボ関連

◆ 6.1 Ethnography Lab

大阪大学の Ethnography Lab は、フィールドワークと質的研究の教育、研究、国際交流を目的として、2018 年に人間科学研究科に設置された。Lab では、人類学と社会学の教員が中心になって、①学部と大学院におけるエスノグラフィ教育の企画と開発、②トロント大学を中心とした海外の大学と連携した国際集中講義の開催、③文理融合研究を行っている。2019 年度の活動内容は下記の通りである。



教育活動

- エスノグラフィ関連カリキュラムの整備（フィールド調査法特講、人間科学方法論演習、応用人類学特講）
- エスノグラフィ教育に関する戦略の策定（新教材の開発、授業及び教材のプロトタイピング）
- 学部生・修士課程大学院生向けのエスノグラフィ相談会、課外セミナーの実施
- キャリア教育と就職支援

国際交流

Ethnography Lab では、未来共生イノベーター養成プログラムより引き継いだトロント大学での国際研修をさらに発展させ、本学において国際的な大学院コース（集中講義）を運用することも使命としている。2019 年の GW 期間中に 30 名近い大学院生、教員を招いてコースを実施した。これにはトロント大学、マンチェスター大学、コペンハーゲン情報技術大学という複数の大学が参加し、共同授業を通じて国際交流を深める機会となった。

文理融合

エスノグラフィへの関心は、コンピュータ科学、環境科学、データサイエンス、デザインなどの領域で急激に高まっている。

現在、Ethnography Lab では、デザイン、環境科学、データサイエンス、気候変動適応と環境人文学の分野において文理融合研究を推進している。これらの活動は原則として外部資金によって運営されている。

- 東京大学 DIAS (Data Integration and Analysis System)、東京大学工学系研究科社会基盤工学専攻と、水文シミュレーション・モデルを用いた社会基盤デザインのためのエスノグラフィの活用についての研究を実施
- 気候変動について人文社会系の研究者が対話を行う「人新世サロン」を実施

研究開発

Ethnography Lab では、新たな調査法の研究開発を行っている。特に、上記の文理融合研究においては従来の社会科学的なエスノグラフィとアルゴリズムによるデータ収集・分析、組織や活動のデザイン、デジタル・ファブリケーションなどを結びつけた新たな手法が必要とされている。これら transdisciplinary な方法を開発するために、Ethnography Lab では外部のパートナーと共同プロジェクトを推進している。2019 年の活動の一例は下記の通りである。

- Digital methods に関する調査を実施
- デザインとエスノグラフィのコラボレーションについて、京都工芸繊維大学、山口情報芸術センター、専修大学ネットワーク情報学部などの教員と協議

◆6.2 災害ボランティアラボ

2019年度は、主として4つの活動を実施した。内容は下記のとおりである。

- (1) 台風19号豪雨災害の支援活動（企業と連携したボランティアバス、活動報告会）
- (2) 新型肺炎学習会（5回）
- (3) 防災ピクニック（新型コロナウイルス対応のため縮小して実施）
- (4) 独居高齢者への「よりそい隊」の活動（新型肺炎学習会の成果）



(1) 台風19号豪雨災害の支援活動

① ボランティアバス

日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）が主催、株式会社フェリシモ様の助成金を使用させて頂き、長野県長野市にボランティアバスを運行した。

日 程：2019年11月29日（金）～12月2日（月）

場 所：長野県長野市

内 容：家屋の片付け、泥かき、写真修復作業など

協 力：関西学院大学ヒューマン・サービス支援室、西宮市社会福祉協議会

② ボランティアバス活動報告会の開催

日 時：2019年12月19日（木）15:30～16:30

場 所：人間科学研究科本館1階 インターナショナルカフェ

内 容：活動報告と参加学生の感想発表

(2) 新型肺炎学習会の開催

新型コロナウイルスに関する情報収集と知識を学び、活動につなげていくために開催。大阪大学人間科学研究科をメイン会場とし、オンラインで学外・国外の参加者にも参加した。

① 第1回学習会

日 時：2020年2月21日（金）

17:00～18:30

内 容：新型肺炎についての国内外の
状況把握

② 第2回学習会

日 時：2020年2月27日（木）

10:00～12:00

内 容：新型肺炎について正しい知識を学ぶ
情報提供：守山敏樹
（大阪大学キャンパス健康支援センター長）
コーディネーター：渥美公秀
（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

③ 第3回学習会

日 時：2020年3月9日（月）13:00～16:00

内 容：中国、台湾の現状から学ぶ

情報提供：張國遠（新安世紀教育安全科技研究院院長）

李フシン（京都大学防災研究所研究員）

吉椿雅道（CODE 海外災害援助市民センター事務局長）

コーディネーター：渥美公秀（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

④ 第4回学習会

日 時：2020年3月18日（水）

13:00～15:00

内 容：新型肺炎渦に見る社会心理

話題提供：三浦麻子

（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

コーディネーター：渥美公秀

（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

⑤ 第5回学習会

日 時：2020年3月25日（水）

15:00～18:30

内 容：国境を越えた情報共有のネットワークについて

情報提供：張國遠（新安世紀教育安全科技研究院院長）

吉椿雅道（CODE 海外災害援助市民センター事務局長）

コーディネーター：渥美公秀

（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

(3) 防災ピクニックの開催

大学関係者や地域住民との交流を図り、共に防災について楽しく学ぶために開催

日 時：2020年3月20日（金・祝）11:00～13:00

会 場：未来共創センター前と吹田キャンパス内

内 容：スマホを使ってキャンパス内の防災探検と炊き出し訓練

7 その他の活動

大阪大学共創 Day2019@EXPOCITY に参加しました！

「新聞記者になって自分と社会の未来を描こう」



人間科学研究科附属未来共創センターと、大阪大学社会ソリューションイニシアティブ (SSI) の共同主催で、「新聞記者になって自分と社会の未来を描こう」というテーマで参加しました。また、高等教育・入試研究開発センター (CHEGA) にも共催いただきました。

ブースでは、SSI や未来共創センターからの先生や大学院や学部 of 学生の方から、研究や学習についての話や、仕事やボランティアなど様々な社会での活動や学生生活の話をしていただきました。そしてその話も参考にして、参加者がこれから社会で活躍をするイメージや、より良い社会が生まれた姿を、新聞記事形式で書いていただきました。記事を書ってくれたのは主に小学生のみなさんで、少し難しいかと思いましたが、みんな想像力や創造力を活かして、素敵な未来の姿を描いてくれました。

エキスポシティには、未就学児など小さなお子様も多数いらっしゃいました。未来の記事まではかけなくても、未来の絵を描いてもらったり、共創 DAY ブースの写真をとってきて、それについての記事を書いてもらったりもしました。

このように、来場のみなさんには、記事のコース、絵のコース、写真のコースを選んで頂きました。記事コースは 18 名、絵のコースには 66 名、写真コースには 16 名、合計でちょうど 100 名の方がエントリーしてくださいました。

皆さんに作成いただいた 87 の記事・絵・写真コースのコンテンツは、こちらのサイトから見ていただけます。

<https://ssi-ageha.appspot.com/group/4edb035c-38ee-4c6c-a8f1-1caa3b086354/>



未来共創センター カフェ事業



2019年度より、未来共創センターの場所がE105に移動しました。ぜひセンターに立ち寄ってほしいという思いから、センターの前の廊下にて「まなびのカフェ」を月2回のペースで開催しました。月ごとにセンターに在室する教員がカフェを担当し、カフェでお茶をしながら待っています。センターを訪れる学生には事前に担当教員についてのポスター掲示をし、興味を持った学生が話を聞きにきたり、とにかく人が集まっているのでふらっと立ち寄ってみたり。事前にテーマを決めることなく、なんでも話せる場を目指しました。お茶やお菓子をつまみながら、研究のこと、学生生活のことなど様々に話していました。

写真洗浄会@未来共創センター



2020年1月から2月にかけて写真洗浄会を3回行いました。写真洗浄とは、水害などで泥に汚れてしまった家族写真を洗って持ち主の方にお返しするボランティア活動のことです。この活動は、東日本大震災以降全国的に広がっています。今回は、12月に実施した長野でのボランティアバスの際にお世話になったお宅の水損写真を洗浄しました。4人がかりで1時間半かけてきれいになったのは約100枚。お預かりした写真の5分の1にも満たしません。大阪でもできるボランティア活動として、今後も末永く続けていきたいと思っています。(宮前良平 人間科学研究科共生学系・助教)

社会と関わり、知見を広げるチャンスになる

2018年6月の大阪府北部地震をきっかけに、未来共創センターのシンポジウムなどに参加するようになりました。研究分野が地域コミュニティにおける防災であったことから、主に災害や地域交流に関わるイベントに参加させていただくことが多かったです。

私がこれらの活動で魅力的だと感じたのは、産官社学の連携を体現している点です。大学主催の活動は、大学関係者のみで行っているイメージがありました。しかし、未来共創センターの活動では至る所で連携が見られ、そこに学生が関わることができます。フィールドワークなど学外で研究をしていた私にとって、自分の研究の進め方について考えさせられる観点を得ることができたと思います。逆に、学生の日々の学びをアウトプットする機会にもなっていました。学内では通底している価値観が、社会に出れば一般的ではないというギャップを知る機会にもなり、知見を広げるチャンスにもなっていると感じました。

このような活動を実現できているのは、共に活動している学生に限らず、惜しみなく後押ししてくれる教職員の皆様のおかげだと痛感しております。「こんなにも背中を押してもらえるのか」と驚いたことは一度や二度ではありません。学生が学外に発信する、あるいは学外との橋渡しをすることを全力で応援して下さる土壌があると思いました。



山本 栞理

(人間科学部未来共生物学
講座4年)

新しい視点や新しい自分を見出す活動

昨年度は、未来共創センターの活動に参加させていただき、私は主に「学びのカフェ」やシンポジウムの運営補助を行いました。その中で、他分野の教員や学生、そして企業やNPO関係者、公務員の方々といった、普段の学生生活では会うことのない人々と歓談し、議論する機会をいただくことができました。イベントにおいて、さまざまな背景を持つ人々が議論をする際には、すれ違いもありましたが、そうした違いを乗り越えて解決を模索してゆく過程は、これからの社会には欠かせないものであると感じます。また、こうした経験は、私の研究にも良い影響を与えていると思います。多様な人々と接することで、自身の研究をさまざまな視点から観察する能力が高まり、それが研究の深みや普遍性の獲得につながってゆく事もあると思います。未来共創センターの活動に参加することは、就職を目指す学生にとっても、研究者を目指す学生にとっても、大変有意義だと思います。より多くの学生が、センターの活動に参加し、そこで新しい視点や新しい自分を見いだせるようになれば、素晴らしいと思います。



八木 景之

(人間科学研究科未来共生物学
講座博士後期課程2年)

多方面からの声に耳を傾ける必要性

未来共創センター主催のランチトークに参加しました。トークテーマは、「実践と研究」で、なかなか乗り越えられない壁についてみんなで考えました。自分は助産師として、寺村さんは作業療法士としての実践を話しましたが、話すことをまとめる段階で、実践者の自分の壁は研究であり、続けることで乗り越えた気がつきました。ただ、実践でも壁を感じたがゆえに「看護」を考え直そうと博士課程に進んだことも事実です。「看護」は人を対象として人が行う実践です。それゆえに、実践だけで乗り換えられないのは当然で、深く「人(人間)」についても研究し、考えなおすが必要でした。自分は、双方をリンクしながら壁を乗り越えようとしたのかもしれませんが。

また、実践に対して興味・関心を持つ参加者の方々からの意見が聞けたことは、話すだけではなく刺激にもなりました。一つの領域での考え方は、偏りがちで、多方面からの声に耳を傾けることも必要です。

時間的な制約もあり、大きなテーマで話したいことは尽きませんでした。今後は、開催時間や対象を検討することでさらに充実した時間となるのではないかと考えます。自分にとって、ランチトークの時間は、ただ学ぶだけではない何かを得られた時間となりました。



ごうじ りつこ

(人間科学研究科基礎人間科学
講座博士後期課程修了、

現在は
大阪信愛学院短期大学
看護学科・准教授)

オープン & フラットによる多様性の発揮

私はNTT西日本で人事部に所属しダイバーシティ & インクルージョンの実現に向けた様々な取り組みを行っています。クロスアポイントメント制度を活用して昨年より、本センターに参画させて頂いておりますが、最初に抱いた印象はオープン & フラットでした。

センターは、いつも開かれていて、様々な人が訪れます。主催するイベントやディスカッションのメンバーは、キャリアも年齢、性別も実に多様ですが、フラットに意見が交わされています。自由で忖度が無い分、一つのテーマに関しても出てくる意見がバラエティに富んでいて、イノベーションを起こすにはこういう感覚での議論の積み重ねが必要と感じる事が多々あります。

最近では日本企業の構造も随分とオープンに変わりつつありますが、それでも役職や、キャリアに起因する上下関係などが存在するは事実で、それが自由な議論を妨げてしまう事もあります。ダイバーシティを推進していく上で必要な教育や制度、環境は随分整ってきましたが、それらのツールだけが揃っても、多様な人材が持つ、内面的な多様性(考え、意見、感情 etc)は発揮されません。発揮するにはそれを受け入れる風土が必要であり、センターでの運営はそのヒントとなるものだと感じています。

今後は企業×大学という接点を更に増やして、それぞれが持つ、人材の多様性を、更に豊かなものに、相乗効果を上げるべく取り組みを続けたいと思います。



杉原 薫子

(NTT 西日本株式会社人事部
ダイバーシティ推進室、人間科学研究科附属未来共創センター
准教授)

若きマンパワーは大きな力に

2018年8月に未来共創センター（以下、センター）のプロジェクトとして OOS 協定を締結していただき、大阪府北部地震や西日本豪雨災害の折には、人科の先生や学生さんたちと被災者の支援活動を公式的かつ効果的に展開することが出来ました。また、2019年11月からは未来共創センター内に災害ボランティアラボが発足し、アドバイザーとして新型肺炎学習会の企画や防災ピクニックの実施など、センターの担当教員や事務スタッフの皆様にご協力いただき開催することが出来ました。

NPO だけでは実現できなかったことが、大学の機関との連携で可能になることが多々ありました。特に学生さんたちの若きマンパワーは被災地で大きな力となり、また、豊富なアイデアや実行力は、防災活動などを進めるにあたっても、若者や市民目線に立った内容を創り上げるという点で大きな効果があったように思います。ただ、大学のテスト休み期間になると学生さんの動きが難しくなるので、この点は大きな課題だと思いました。

今後もセンターと連携しながら、「学生出前カフェ」などユニークで魅力的な活動を実施できればと考えています



寺本 弘伸

（認定 NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク常務理事、未来共創センター災害ボランティアラボ）

発行
大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター
〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-2

編集・校正協力
特任事務職員 川渕 千恵子
特任研究員 織田 和明

制作・印刷
株式会社一心社



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 **未来共創センター**